

放課後子ども教室について児童の声を聴く

——タッチパネル式パソコンを使って——

蓮見元子*・北原靖子**
川嶋健太郎***・浅井義弘****

A Research of Children's Opinions on After School Activities in the Elementary School Using the P.C. with a Touch Panel

Motoko HASUMI, Yasuko KITAHARA, Kentaro KAWASHIMA, Yoshihiro ASAI

要 旨

千葉県我孫子市第一小学校では、昨年度より「放課後児童クラブ」(学童保育)だけでなく、全児童を対象とした「放課後子ども教室」(あびっ子クラブ)を開始し、子どもたちの充実した放課後の過ごし方を模索している。放課後子ども教室や学童保育について子どもの声を直接聞きたいと考えたが、低学年の児童の利用が多く、質問紙配布方式のアンケートには困難があった。また、質問文の内容や、回答形式も低学年児童に理解できるものでなくてはならない。そこで今回、低学年児童でも適用しうる方法として、パソコン画面上に音声とともに質問文を提示して、回答は画面上に表示される文字(ボタン)に触ればよいというタッチパネル式のアンケートの開発を試みた。そして作成された質問文と回答形式をタッチパネル式パソコンに組み込み、アンケート調査を実施した。

本研究では、放課後の過ごし方や学童保育、放課後子ども教室などについての当事者の声を反映させる自己点検評価システムの開発に向けた第一歩として、2件法・5件法により回答を求めたタッチパネル式アンケート調査から得られた結果を分析し、子どもの声を明らかにした。

キーワード：放課後子ども教室、学童保育、タッチパネル式アンケート、自己点検評価システム

*教授 発達臨床心理学

**准教授 発達心理学

***助手 学習心理学

****教授 臨床心理学

問題と目的

平成18年より、文部科学省の放課後子ども教室推進事業と厚生労働省の放課後児童健全育成事業の一体化連携化を図る「放課後子どもプラン」が創設された（放課後子どもプラン連携推進室，2007）。「地域社会の中で、放課後や週末等に子どもが安全で安心して、健やかに育まれるよう」という本趣旨をふまえ、現在各地域では地域特性をふまえた多様な連携の在り方を模索しつつ、取り組みを始めている段階にある。そして、本来の趣旨にかなった成果が得られているかを適宜冷静に現場検証することが求められる。

中でも直接当事者である子どもが、これら新しく拓かれた場における活動をどうとらえているかを把握することは、不可欠であろう。その際には、子どもから評価や意見を漫然と収集するのでは不十分である。まずは発達途上の子どもにわかる聞き方、できる答え方で尋ねる必要がある。また、子どもたちの答から「学年によって子どもの評価は違うのか」「人気のある活動場所やプログラムは何か」など、評価の違いをもたらす原因をさぐり、その結果が今後の運営に活かせるような「受け止め方」をするべきであろう。創始期の今こそ、子どもの声を「汲み取る＝きちんと尋ね・正しく受け止める」手立てについての検討が不可欠である。

これまで「放課後のこどもの居場所」や学童保育の研究は、さまざまな領域が参画し学際的に行われてきた。建築の立場からは「子供の遊び場空間についての現状分析」（小泉・川口・田爪・長谷川・柴村・大石，2003）や「子どもの居場所作り活動の実態と課題」（本庄・三橋・渡辺，2006）、社会教育・レクレーションの立場からは「子どもの居場所づくり推進事業についての評価と課題」（宮部・仲野・丸山，2007）、児童学の立場からは「学童期における保育の必要性」（村井，2007）、家政学の立場からは「学童保育所に通う子どもの調査」（塚田・小伊藤，2007）などである。たとえば建築学の立場からは、放課後子ども教室に学校施設が使われる場合、設備面の不備や利用教室の位置による不便さがあるなどの問題点が指摘されている。また、いかに安心安全で豊かな空間を確保するかが問題であると議論されている。社会教育の立場からは、低学年だけではなく中高学年生が入ることによってスポーツ活動など比較的大規模な集団へと発展することが指摘され、子どもが活動に参加する目的の聴き取り調査などを交えて、子どもの構成をふまえたプログラムの開発研究を行っている。しかしながら、児童を研究対象とする心理学領域からの研究は乏しく、子どもの発達段階を考慮した方法で「本人から直接」「満足の程度をたずねる」方法や、回答を「統計的に解析して」「次のあり方に活かす」方法についての研究例はない。

そこで筆者は、「放課後子どもプラン」に準拠して19年6月から千葉県我孫子市第一小学校

放課後子ども教室について児童の声を聴く

敷地内で展開されている放課後子ども教室（呼称：あびっ子クラブ、以下あびっ子とする）において、利用当事者である児童の活動実態と満足度を把握するパイロット調査を実施した（北原・蓮見他，2008）。本調査を試行する前のあびっ子では、受付開始時点で把握された当日参加児童の氏名からその日の全利用者数や学年別性別内訳が確認されていたが、その他は日々子どもたちの様子を経験的にとらえるに留まっていた。また、利用児童は1年から6年までと発達に大きな開きがある上、現場には調査に割ける人手や時間や場所のゆとりがなく、活動可能な場所やプログラムも日によって異なっていた。したがってどうすれば現場に多大な負担をかけず調査できるのか、また、調査できたとしても、そこからどれほど今後活かせる知見が得られるかが課題であった。パイロット調査では、とりあえず児童1人5分程度の「ひとことアンケート」を作成実施し、各場所の活動に対する参与行動観察もとり混ぜつつ、現場で許容できる範囲のごく簡単な質問（例：「今日はどれくらい楽しかったですか？」→「ちょっとだけ」「ふつう」「まあ」「すごく」から1つ選択）から、具体的にどのような分析ができるか模索した。その結果、子どもたちは総じてあびっ子の活動に高い満足感をもっていたが、学年によって満足度は異なり、低学年より3年生の方が満足度が高いことが明らかとなった。また、子どもは友だちの存在こそを「あびっ子」の魅力ととらえているが、大人のさりげない介入が円滑な活動を支えていることなどが示唆された。子どもにわかりやすい尋ね方を工夫し、回答を活動内容や学年性別などの諸変数と組み合わせることで、今後の活動運営に活かすヒントを得ることが十分可能だと予想された。

そこで、今回、放課後子ども教室や学童保育について、それらを利用している子どもの声をもう少し詳しく聞きたいと考えた。しかしながら、「放課後児童クラブ」（学童保育）および全児童を対象とした「放課後子ども教室」（あびっ子クラブ）の利用は低学年の児童が多く、質問紙配布方式のアンケートには困難があった。さらに、質問文の内容も、回答形式も低学年児童にも理解できるものでなくてはならないと思われた。そこで、低学年児童でも適用しうる方法として、パソコン画面上に音声とともに質問文を提示して、回答は画面上に表示される文字（ボタン）に触れればよいというタッチパネル式のアンケートの開発を試みた。これらの作成された質問文と回答形式をパソコンに組み込み、2008年3月にアンケート調査を実施した。

本研究では、現場と連携しつつ、子どもたちが「放課後子ども教室」（あびっ子クラブ）をどう受けとめているのか、参加数を把握するだけでなく、その場に集う子どもや大人の声を「きちんと尋ね・正しく受け止める」自己点検評価のあり方を検討し、その標準的な姿を具体化し提案することを目的とした。本報告ではその第一歩として、学童保育児童に行ったタッチパネル式アンケート調査を中心に以下のことを検討する。

- 1) タッチパネル式のパソコンを使ったアンケート調査は小学生が理解できるものであったか、回答形式は2件法のみならず、5件法でも小学生に可能であったか。
- 2) 放課後の過ごし方として小学生は何をしたいと考えているのか、あびっ子利用が多い学童保育利用児童と少ない学童保育利用児童では回答にどのような差異がみられるか。あびっ子が「楽しい」学童保育利用児童と「楽しくない」学童保育利用児童では回答に差異があるのか。
- 3) 学童保育利用児童の保護者は、放課後の過ごし方についてどのような願いを持っているのか、保護者たちが望むことと子どもたちの実際の放課後の過ごし方とでずれがあるか。

方法

質問項目の作成：

2件法：質問は低学年の児童でもわかるものということで検討を重ね、たとえば放課後の過ごし方として「こうていであそぶこと」「しゅくだいをすること」などをいくつかあげ、それに対して、したいのであれば「はい」、したくないのであれば「いいえ」で答える形式とした。以下に質問文として使用された24項目を記載する。なお、質問文は一部片仮名を使用したか、他のすべては平仮名であった。

1. うんとたのしいことはしたい？
2. うんとつまらないことはしたい？
3. たいいくかんであそびたい？
4. としょしつでほんをよみたい？
5. こうていであそびたい？
6. ひろいへやであそびたい？
7. あびっこのやくそくをまもりたい？
8. うわばきにはきかえたい？
9. おとなのひととあそびたい？
10. あそびをおしえてもらいたい？
11. べんきょうをおしえてもらいたい？
12. ひとりですきなことをしたい？
13. しゅくだいをしたい？
14. がくどうのやくそくをまもりたい？
15. おやつをたべたい？
16. ひとつのへやであそびたい？
17. まんがやゲームであそびたい？
18. なかよしだけであそびたい？
19. なふだをつけたい？
20. ともだちとあそびたい？
21. がくどうであそびたい？
22. あびっこであそびたい？
23. うんとつまらないことはしたい？
24. うんとたのしいことはしたい？

このうち、1. うんとたのしいことはしたい？ と24. うんとたのしいことはしたい？

2. うんとつまらないことはしたい？ と23. うんとつまらないことはしたい？

は、信頼性を確認するための項目であった。

第一小学校の放課後子ども教室の場合、学童保育児童があびっ子に参加すると、学童保育室

放課後子ども教室について児童の声を聴く

だけでなく、体育館・図書室・広い部屋が使える、大人と遊んだり、遊びを教えてもらえることになっていたが、あびっ子に参加するためには、上履きに履き替え、名札をつけなくてはならなかった。また、様々な約束を守る決まりにもなっていた。3. 4. 6. 7. 8. 9. 10. 19の項目は、あびっ子関連の項目としていられた。他方、学童クラブでは、おやつが出され、マンガやゲームがあり、一人で好きに遊べたり、宿題をすることもできた。12. 13. 14. 15. 16. 17の項目は学童クラブ関連項目として入れられた。また、あびっ子と学童に共通な項目として、5. 11. 18. 20をいれた。

さらに、全体として学童クラブとあびっ子クラブを子どもがどのように評価しているかを見る項目として、21, 22の2つの項目を、大人の見守りを必要としているかに関連する項目として、9. 10. 11をいれた。

5件法：回答形式が5件法によるものも2件法と同一の項目構成とした。

調査協力者：我孫子市第一小学校放課後児童クラブの児童。2件法調査参加者53名、5件法調査参加者49名、両方とも参加した者44名。

表1 調査参加児童の学年別回答形式別人数

	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	合計
2件法に参加したもの	19名	9名	10名	7名	8名	53名
5件法に参加したもの	18名	9名	9名	6名	7名	49名
両方に参加したもの	16名	6名	9名	6名	7名	44名

材料：ノートPC、タッチパネル式モニター、マーステクノサイエンス社製ICカードリーダー、ICカード。

手続き：2008年3月、学童保育室に机とノートPCおよびタッチパネル付モニター等を設置した。児童は受け取った整理券順に、タッチパネルPCの前に座り、学年と性別データの記録された非接触型ICカードをカードリーダーにかざして、ICカードの読み取りを行った。

パソコンの画面に教示を示す文字と音声（「ほうかご、がくどうやあびっこで、きみのしたいことはなに？ きみのきもちを はい○、いいえ×のなかから えらんでおしえてね」）が同時に提示された後、児童がスタートボタンを押すと順次、24の質問文が音声と同時に提示されるようになっていた。

5件法の教示は、「ほうかご、がくどうやあびっこで、きみのしたいことはなに？ きみのきもちを「とてもしたい」「したい」「ふつう」「あまりしたくない」「したくない」のなかか

ら えらんでおしえてね) というものであった。

2件法では各質問文の後、「はい」、「いいえ」の2つの選択ボタンがあり、5件法では「とてもしたい☆☆☆☆」「したい☆☆☆☆」「ふつう☆☆☆」「あまりしたくない☆☆」「したくない☆☆」という文字と☆がついた5つのボタンがあった。児童が質問文を聴いた後、回答としていずれかのボタンを押すと次の質問文に移った。すべての回答が終わるとお礼の文が表示され、アンケート調査が終了だとわかるようになっていた。

2件法を実施した1週間後に5件法を実施した。

結果と考察

1) 放課後したいことについての子どもの考え

① 2件法による回答の分析

図1に「はい」と回答した子どもの比率を上位から順に示した。

20. ともだちとあそびたい 1. 24. うんとたのしいことはしたい 5. こうていであ

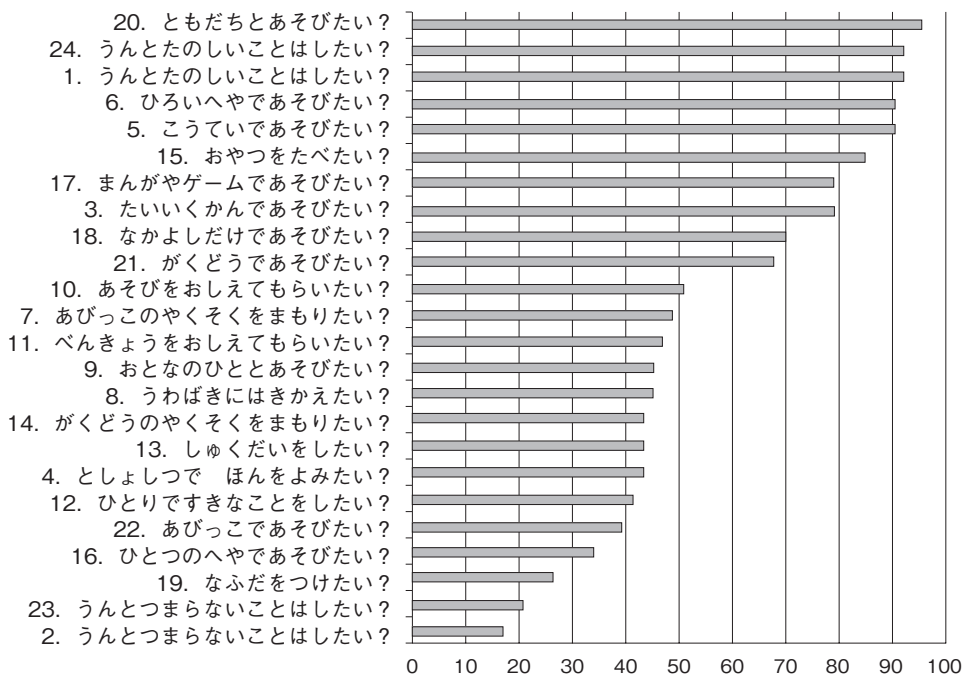


図1 各項目の「はい」の比率 (2件法)

放課後子ども教室について児童の声を聴く

そびたい 6. ひろいへやであそびたい 15. おやつをたべたい、で「はい」の回答が80%以上であった。 17. まんがやゲームであそびたい 3. たいいくかんであそびたい? 18. なかよしだけであそびたい 21. がくどうであそびたい 10. あそびをおしえてもらいたい で、「はい」の回答が50%以上であった。

学童クラブの子どもたちは「友だちと遊ぶこと」、「うんと楽しいこと」、「校庭や広い部屋で体を動かして遊ぶこと」、「おやつを食べること」をしたがっていた。その反面、「あびっ子の約束を守ること」、「一つの部屋で遊ぶこと」、「上履きにはきかえること」、「名札を付けること」、などはあまりしたがついていなかった。

② 5 件法による回答の分析

図 2 に 5 件法による各項目の平均評価点を下に示した。

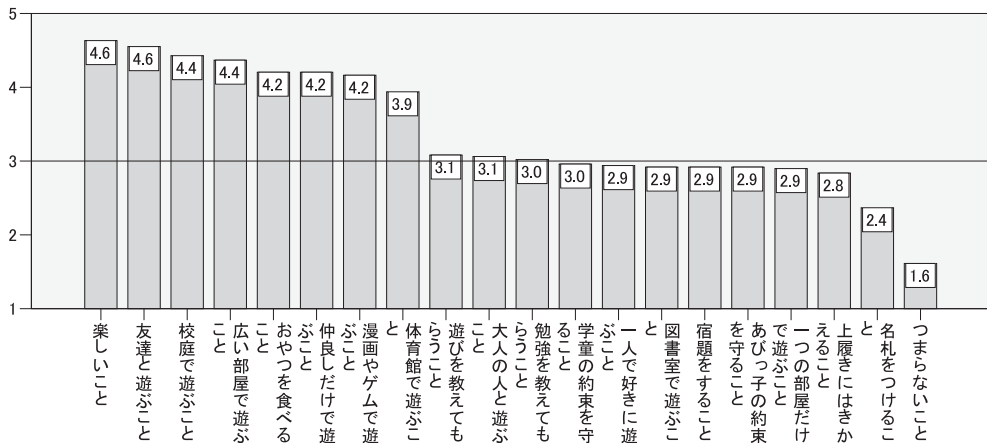


図 2 「放課後、どれくらいしたいか (5 件法)」への回答平均 (49 名)

「友だちと遊ぶこと」、「うんと楽しいことをすること」が最も高く、「校庭で遊ぶこと」、「広い部屋で遊ぶこと」、「おやつを食べること」、「仲良しだけで遊ぶこと」、「マンガやゲームで遊ぶこと」、「体育館であそぶこと」の順であった。

それに対して、低かった項目は、「名札を付けること」(2.37)、「上履きに履き替えること」(2.84)、「一つのへやで遊ぶこと」(2.90)、「あびっ子の約束を守ること」(2.92)であった。

子どもは広い場所で仲良しの友だちと遊んだり、おやつを食べることを望んでいたが、一つのへやだけで遊ぶことや約束ごとが多いことは望んでいなかった。

2) 学童保育児童にとっての「あびっ子」と「学童保育」

「あびっ子であそびたい」「学童で遊びたい」の2項目を5件法の回答で比較すると、「あびっ子であそびたい」は評定平均値3.12, 標準偏差1.424, 「学童で遊びたい」は評定平均値3.76, 標準偏差1.109であった。t検定を行ったところ, $t(48) = 3.360$ $p < .01$ で「学童で遊びたい」が有意に高かった。「あびっ子で遊びたい」の回答を2件法でみると, 1, 2年生で「はい」と答えた児童は8名, 「いいえ」と答えた児童は20名で, 「いいえ」が圧倒的に多かった。3, 4, 5年生では「はい」と答えた児童は13名, 「いいえ」と答えた児童は12名で, 「はい」と「いいえ」はほぼ同数であった。低学年の学童保育児童は, あびっ子で遊ぶことをあまり望んでいないようであった。

表2 あびっ子であそびたいに「はい」「いいえ」と回答した学年別の人数(2件法)

		1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	合計
あびっ子で遊びたい	はい	8	0	4	7	2	21
	いいえ	11	9	6	0	6	32
合計		19	9	10	7	8	53

他方, 先に示したあびっ子関連項目(項目3, 4, 6, 7, 8, 9, 10, 19)の平均評価点は3.19, 標準偏差.903であり, 学童保育関連項目(項目12, 13, 14, 15, 16, 17)の平均評価点は3.35, 標準偏差.624であった。t検定を行ったところ, $t(48) = -1.327$, n.s. で, 有意な差異はなかった。

あびっ子をよく利用している子どもは放課後の過ごし方やあびっ子, 学童についてどう思っているのかを調べるために, まず, あびっ子の利用状況を出席簿から数えた。学年別の年間平均利用回数は1年生が36.2, 2年生が19.4, 3年生が13.6, 4年生が15.3, 5年生が7.8であった。1年生がもっともあびっ子クラブを利用していた。

あびっ子クラブに16回以上利用した子どもを高利用児童群($N = 25$), 14回以下であった子どもを低利用児童群($N = 24$ 名)とし, 各質問項目の平均評価点を比較したところ, 以下に示す2つの項目で有意な差異がみられた。「がくどうであそびたい」が高利用児童群では4.12, 低利用児童群では3.38であり, 有意な差異があった($t(47) = 2.47$, $p < .05$)。また, 「あびっこであそびたい」でも, 高利用児童群では3.64, 低利用児童群では2.58であり, 両群間で有意な差があった($t(47) = 2.77$, $p < .01$)。

あびっ子をよく利用している子どもはあまり利用していない子どもに比べ, 「がくどうであそびたい」, 「あびっ子であそびたい」とのぞむ傾向があった。

放課後子ども教室について児童の声を聴く

次に、あびっ子の満足度に関係する要因は何かを検討した。あびっ子で遊びたいと考えている子ども（「とてもしたい」、「したい」と回答した22名）とあまり遊びたくないと考えている子ども（「あまりしたくない」、「したくない」と回答した16名）の回答の違いをみたところ、あびっ子で遊びたいと考えている子どもは、「たいいくかんであそぶ」（ $t(17) = 4.38, p < .01$ ）、「あびっこのやくそくをまもる」（ $t(36) = 2.82, p < .05$ ）、「あそびをおしえてもらう」（ $t(36) = 2.90, p < .01$ ）、「がくどうのやくそくをまもる」（ $t(34) = 3.82, p < .01$ ）、「なふだをつける」（ $t(32) = 3.71, p < .01$ ）「がくどうであそぶ」（ $t(23) = 2.70, p < .05$ ）の5項目で平均評価点が高く、「ひとりですきなことをする」（ $t(36) = -2.13, p < .05$ ）、「ひとつのへやであそぶ」（ $t(36) = -2.15, p < .05$ ）の2項目で平均評価点が低かった。図3に示す。

あびっ子であそびたいと考えている子どもは、一つの部屋で遊んだり、一人で好きなことをするというより、体育館で遊んだり、遊びを教えてもらいたいと考えていた。また、遊びや生活の決まりに対しても守るのが当たり前と考えているようであった。

2件法で尋ねたところ、4年生は全員が「あびっ子であそびたい」に対して「はい」と回答していたが、それ以外の学年では、「いいえ」の回答が「はい」の回答を上まわっていた。

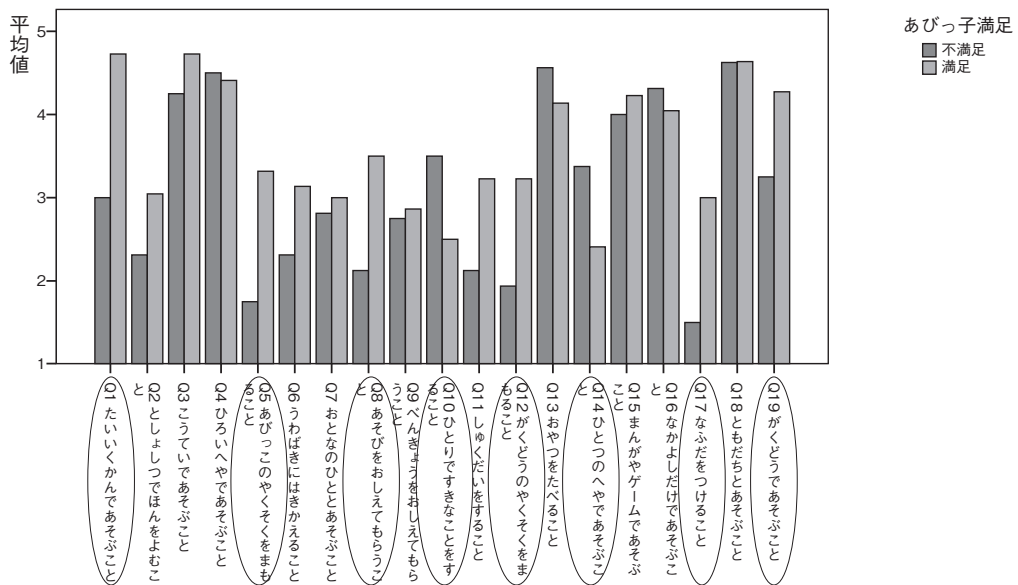


図3 放課後子ども教室への満足度（あびっ子で遊びたい／あびっ子であまり遊びたくない）で2つのグループ分けた子どもの回答の違い

低学年の児童ほど大人とのかかわりを求めているのではないかと考え、大人とのかかわりに関連する項目（項目9, 10, 11）について、学年による差異を調べた。分散分析の結果、「おとなのひととあそぶ」($F(4) = .718, n.s.$), 「べんきょうをおしえてもらう」($F(4) = 1.059, n.s.$)には有意差がなかったが、「あそびをおしえてもらう」で有意差があった ($F(4) = 2.745, p < .05$)。

「あそびをおしえてもらう」について学年間で多重比較（Tukey法, HSD）をしたところ、3年生と5年生の間でのみ差異があった、したがって、低学年児童が高学年児童より大人とのかかわりを求めているというわけではなかった。

これらの結果より、あびっ子に参加すると体育館で遊べたり、大人から遊びを教えられる、と子どもたちは認識しているようであったし、遊びや生活の規則に対しても、守るのが当たり前前と考えているようであった。しかしながら、あびっ子の人気はそれほど高いとはいえなかった。

3) 2件法の回答と5件法の回答の関連性

2件法で「はい」の回答が50%以上であった8項目はすべて5件法で評定平均が3以上であった〔友だちと遊ぶ (96.2% ⇔ 4.55), 広い部屋で遊ぶ (90.6% ⇔ 4.37), 校庭で遊ぶ (90.6% ⇔ 4.43), おやつを食べる (84.9% ⇔ 4.20), 体育館であそぶ (79.2% ⇔ 3.94), マンガやゲームで遊ぶ (79.2% ⇔ 4.16), 仲良しだけで遊ぶ (69.8% ⇔ 4.20), 遊びを教えてもらう (50.9% ⇔ 3.08)〕。「大人の人と遊ぶ」は5件法で3.05で、3を越えていたが2件法では45.3%で、わずかに50%を超えていなかった。

2件法と5件法の両方に参加した44名の回答を同一の質問項目ごとにクロス集計し、関連性の有無を調べた。「おやつを食べる」, 「マンガやゲームをする」をのぞいて、有意な関連が示された(表3)。

さらに、2件法, 5件法ともに最初と最後に挿入した2項目（「うんとたのしいことをしたい」「うんとつまらないことをしたい」）の相関係数を算出した。いずれも高い相関が示された(表4)。

これらより、今回のアンケート調査において、5件法は2件法と同様の回答傾向にあったといえよう。

4) 5件法の回答からの分析

①重回帰分析

放課後子ども教室について児童の声を聴く

表3 2件法回答, 5件法回答の関連性

質問項目	Pearson のカイ 2 乗	自由度	漸近有意確率 (両側)
3. 体育館であそぶ	17.162 (a)	4	.002**
4. 図書館で本を読む	12.207 (a)	4	.016*
5. 校庭で遊ぶ	18.612 (a)	4	.001**
6. 広い部屋で遊ぶ	14.558 (a)	4	.006**
7. 学童の約束を守る	19.973 (a)	4	.001**
8. 上履きに履き替える	11.073 (a)	4	.026*
9. おとなと遊ぶ	24.107 (a)	4	.000***
10. 遊びを教えてもらう	19.026 (a)	4	.001**
11. 勉強を教える	10.390 (a)	4	.034*
12. 一人で遊ぶ	15.593 (a)	4	.004**
13. 宿題をする	15.471 (a)	4	.004**
14. あびっこ約束を守る	17.897 (a)	4	.001**
15. おやつを食べる	8.284 (a)	4	.082
16. 一つの部屋で遊ぶ	10.369 (a)	4	.035*
17. マンガやゲームで遊ぶ	8.010 (a)	4	.091
18. なかよしだけで遊ぶ	12.417 (a)	4	.015*
19. なふだをつける	17.680 (a)	4	.001**
20. 友だちと遊ぶ	32.476 (a)	4	.000***
21. 学童で遊ぶ	11.702 (a)	4	.020*
22. あびっこであそぶ	11.804 (a)	4	.019*

表4 同一項目の2件法・5件法の再検査の相関

	Pearson の相関係数	有意確率 (両側)
②うんと楽しい②うんと楽しい (再)	.459	.001**
⑤うんと楽しい⑤うんと楽しい (再)	.764	.000***
②うんとつまらない②うんとつまらない (再)	.636	.000***
⑤うんとつまらない⑤うんとつまらない (再)	.806	.000***

「あびっ子で遊ぶ」を従属変数とし、他の質問項目を説明変数として重回帰分析を行った。「体育館で遊ぶ」($\beta = .412$ $p < .01$)「広い部屋で遊ぶ」($\beta = -.318$ $p < .05$)「勉強を教えてもらう」($\beta = -.274$ $p < .05$)「まんがやゲームで遊ぶ」($\beta = .267$ $p < .05$)であり、「学童で遊ぶ」

を従属変数としたところ、「一人で遊ぶ」($\beta = -.524$ $p < .05$)の影響を受けていた。また、「あびっ子の利用回数」(実際の利用回数)は、「広い部屋で遊ぶ」($\beta = -.469$ $p < .05$)、「大人と遊ぶ」($\beta = .533$ $p < .05$)の影響を受けていた。

これらから、学童保育児童は「放課後子ども教室」(あびっ子)を体育館や広い部屋で遊ぶことができ、大人が遊びを教えてくれるところととらえており、学童保育室と一緒に遊ぶ友だちのいるところと捉えているようであった。

② 因子分析 (主因子法)

主因子法による因子分析をし、Kaiserの正規化を伴うプロマックス法による回転を行った。因子負荷量の低い項目を除去して、因子分析をくり返したところ、以下の構造行列が示された。

表5. 構造行列

	因子			
	1	2	3	4
あびっこのやくそくをまもる	.849	-.028	.143	-.023
がくどうのやくそくをまもる	.822	-.208	.141	-.192
なふだをつける	.708	.054	.217	-.066
うわばきをはきかえる	.695	-.022	-.138	-.092
あそびをおしえてもらう	.672	.071	.211	-.0.22
おとなのひととあそぶ	.589	.344	.020	.273
としょかんでほんをよむ	.563	-.014	-.035	.033
しゅくだいをする	.494	-.125	.160	-.0.36
ともだちとあそぶ	.051	.930	.283	.011
おやつをたべる	-.111	.650	-.014	.265
ひろいへやであそぶ	.047	.615	.266	.132
たいいくかんであそぶ	.297	.212	.870	.144
こうていであそぶ	-.065	.211	.594	-.243
ひとりであそぶ	-.092	.108	-.128	.719
まんがやゲームであそぶ	-.079	.123	.048	.513
ひとつのへやであそぶ	.028	.042	-.384	.459

因子抽出法：主因子法

回転法：Kaiserの正規化を伴うプロマックス法

第1因子「生活の決まりや大人とのかかわり」第2因子「友達遊びやおやつの楽しみ」第3因子「運動やスポーツ」第4因子「室内での好きな遊び」と命名され、比較的解釈のしやすい因子が出てきたことから児童はタッチパネル式アンケートに適切に回答できていたと考えられた。4つの因子の平均評価点は2.88, 4.37, 4.18, 3.33であり、t検定の結果、平均評価点の高さは第2因子=第3因子>第4因子>第1因子の順であった。男女差は第4因子で見られたが、学年差はいずれの因子間でもなかった。

③クラスター分析

次に5件法の回答より、クラスター分析を試みた。上記の因子分析と同様の分解結果ではなかったが、児童が「したいこと」として平均評価点が高かった項目「友達と遊ぶ・広い部屋で遊ぶ・おやつを食べる・校庭で遊ぶ」が一つのクラスターを作っており、「上履きに履きかえる・名札をつける」, 「宿題をする・あびっ子の約束を守る・学童の約束を守る」, 「大人と遊ぶ・遊びを教えてもらう・図書室で遊ぶ・勉強を教えてもらう」などもそれぞれ距離が近くクラスターを作っていた。こういったデンドログラムの結果は、因子分析の結果同様、子どもたちの回答の信頼性をうかがわせるものであった(図4)。

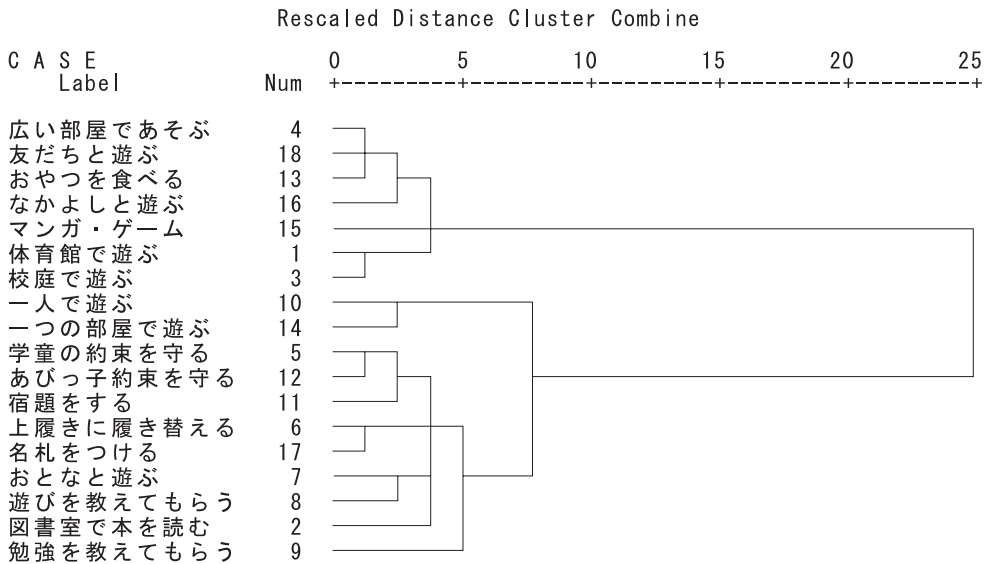


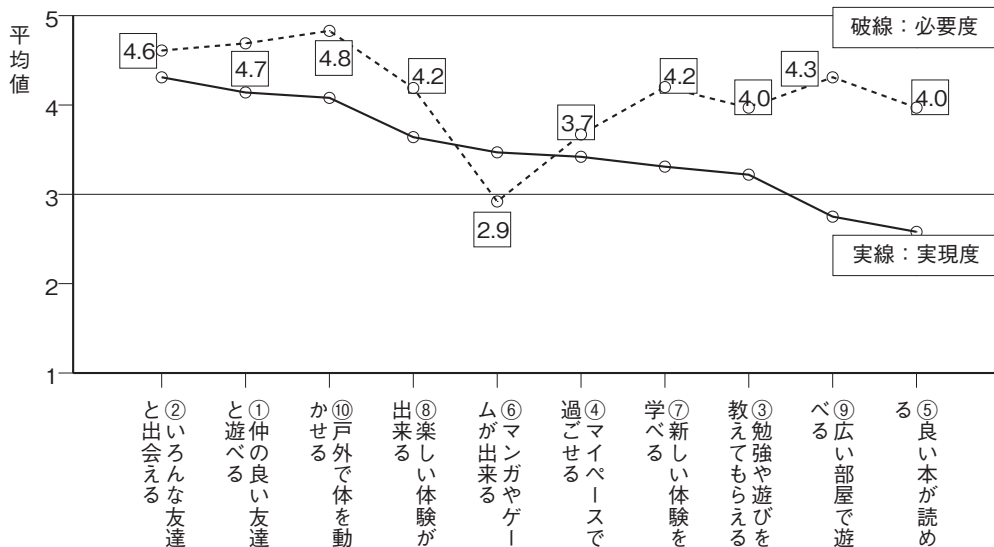
図4 クラスター分析から得られたデンドログラム

5) 親たちの考え、願い

平成20年6月中旬から下旬にかけて、我孫子市教育委員会社会、教育課および第一小学校学童保育父母の会のご協力を得て、著者ら川村学園女子大学研究グループが以下の項目からなるアンケート用紙を作成した(図5参照のこ

表6 学童父母アンケートの学年構成

学年	人数	パーセント	累積パーセント
一年生	11	30.6	30.6
二年生	7	19.4	50.0
三年生	9	25.0	75.0
四年生	3	8.3	83.3
五年生	2	5.6	88.9
六年生	4	11.1	100.0
合計	36	100.0	



(注：実現度) 1：できていない，2：あまりできていない，3：どちらでもない，4：だいたいできている，5：よくできている で評定

(注：必要度) 1：必要でない，2：あまり必要でない，3：どちらでもない，4：まあ必要だ，5：とても必要だ で評定

図5 放課後の必要度と学童保育室での実現度の平均

と)。第一小学校学童保育在籍児童 60 名を対象に，児童一名に対し 1 部ずつ父母アンケートを配布し，36 部が回収された（回収率 60%）。分析は統計処理ソフト SPSS（Ver.15）を使用した。

ここでは，子どもが放課後を過ごす上で必要と思うことや学童保育室でそれらが実現出来ているかについてたずね，親たちの声を子どもたちの回答と比較検討した。

放課後過ごす上で必要なことが学童保育室で実現できている度合いは 10 項目全体平均 5 段階評価で 3.5 となり，中程度を上回っていた。どの項目も，学年によるはっきりした差は認められなかった。ことに高く評価されたのは，「②異クラス異学年の友だちと出会える」「①仲の良い友だちと遊べる」「⑩戸外で体を動かせる」であり，これらは 5 段階で 4.5 以上の評定であった（図 5）。

逆に，「⑤よい本が読める」「⑨広い部屋で遊べる」の平均は 5 段階評価の中央値 3 を下回った。同じ項目を「放課後子どもが過ごす上でどれくらい必要か」の観点から評定したものを学童保育室での実現度と比較すると，多くがまだ及ばないとされた。先に学童保育室で「だいたい出来ている」とされた「①仲のよい友だちと遊べる」「⑩戸外で体を動かせる」も，必要度よりは低かった。「⑥マンガやゲームができる」は，逆に必要を上回っていた。放課後子ども

放課後子ども教室について児童の声を聴く

が過ごす上の必要度と比較すれば、学童保育室での実現度は高くないと思われた（図5）。

子どもたちの希望は放課後、「友達と遊ぶこと」、「楽しいことをすること」、「体育館や広い部屋や校庭で遊ぶこと」、「おやつを食べること」、「漫画やゲームをすること」であった。「友達と遊ぶこと」、「楽しいことをすること」、「体育館や広い部屋や校庭で遊ぶこと」は親たちものぞむところであったが、子どもが「漫画を読んだり、ゲームをしたい」と考えているのに対して、親たちは「勉強や遊びを教えてもらいたい」「よい本を読ませたい」と望み、「広い部屋では遊べていない」と考えているようであった。

総合的考察

学童クラブの子どもたちは「うんと楽しいこと」、「友だちと遊ぶこと」、「校庭や広い部屋で体を動かして遊ぶこと」、「おやつを食べること」「まんがやゲームで遊ぶこと」をしたいと考えていたが、「図書室で本を読むこと」、「一つの部屋で遊ぶこと」、「一人で遊ぶこと」「名札を付けること」「上履きに履き替えること」などはあまり望んでいなかった。また、低学年の学童保育児童は「あびっ子」で遊ぶことをあまり望んでいないようであった。

第一小学校において、学童保育室とあびっ子の教室はそれぞれ校舎の端にあり、いったん外に出てからまた入室するようになっていた。また、第一小学校には広くて優良な図書を揃えた図書室があり、あびっ子クラブから廊下を歩いていけるようになっており、あびっ子クラブに開放していた。しかしながら、今回の調査で、図書室で本を読みたいという項目の平均評価点はやや低く、子どもたちは好んで利用してはいないようであった。あびっ子クラブには、チャレンジタイムが設けられており、スタッフやサポーターの指導のもとお琴を弾いたり、バスケットをしたり、カレンダー作りなどが行われていた。また、図書館を使った本の読み聞かせも行っていた。現在、サポーター登録をしている本学大学院生によって、子どもたちの読書を推進するためにアニメーションというゲーム形式の指導方法を取り入れた試みも行われている。このように、第一小学校の放課後子ども教室ではスタッフ及びサポーターに支えられ、子どもたちの有意義な過ごし方を模索する動きが出てきている。今回、調査を行った学童クラブの子どもは、校庭で遊んだり、学童クラブのへやで過ごし、頻回にはあびっ子の教室に行っていなかった。自主的行動や自己責任が問われるあびっ子クラブでは、大人の後押しなしに自主的に参加するのは低学年児童にはむずかしかったのであろうか。しかしながら、実際には1年生が最も多く利用しており、それは高学年の学童保育児童があびっ子を通さずに直接校庭に行き、自由に遊んでいたからかもしれない。

あびっ子か学童保育かではなく、両者のよさを統合した地域に開かれた「放課後子どもの居場所づくり」が求められるであろう。学童保育室に比べ、放課後子ども教室は地域に開かれ、積極的にボランティアの参加を求めている。両親が働きに出て、放課後、子どもの生きる力をはぐくむ場所として家庭が機能しにくくなった現在、1年生から3年生ごろの比較的低学年の児童の教育の場として、放課後子ども教室は、地域の人々の英知を集め、木工、園芸、読書、芸術、スポーツなど、学校の授業以外に、児童にとって必要なことを大人が教えられる場所である。小学校6年間という大切な時期に、子どもを放置し、漫画やゲームで無為に過ごさせることなく、将来の自立に備えた「実学」「実践の場所」として放課後子ども教室は、現在様々な問題を抱えつつも、必要不可欠なものではないだろうか。また、それは子どもの声を反映したものでならない。今後とも、さらに、よりよい放課後子どもの居場所づくりを模索していく必要がある。

今回、質問紙ではなくタッチパネル式パソコンを使って、低学年児童の声を集約するための調査を行ったが、子どもたちにとって興味を引く楽しいツールであったと思われる。従来、低学年児童には、質問紙にて5件法の回答を求めるのは困難であると考えられており、低学年児童を対象としたものはほとんどなかった。低学年児童に行った場合は、担任教師や家族のものが読みあげて、回答させる形式のものが使われていた。今回のアンケート調査のように、音声と文字が同時に提示されるパソコンを使い、項目の構成などに配慮すれば、低学年児童でもある程度信頼できる5件法のデータを得ることが可能であると確認できたといえよう。もし、5件法で得られた回答が信頼できるものであれば、分析方法は飛躍的に増大する。今後とも、さらに、児童に5件法を使った質問を投げかけていき、子どもの声を聴く方法を模索していきたい。

引用文献

- 蓮見元子・北原靖子・川嶋健太郎・浅井義弘, 2008, 「放課後の過ごし方に関する児童へのタッチパネル式アンケート」, 日本教育心理学会第50回大会発表論文集
- 本庄宏行・三橋伸夫・渡辺真季, 2006, 「『ゆうごう子ども教室』を事例とした子どもの居場所づくり活動の実態と課題—子どもの居場所づくり活動における地域施設の利用に関する研究 その1—」, 日本建築学会大会学術講演概集, pp.473-476
- 川嶋健太郎・北原靖子・蓮見元子・浅井義弘, 2008, 「放課後の子ども教室についてのタッチパネル式アンケート」, 日本心理学会第72回大会発表論文集
- 北原靖子・蓮見元子・川嶋健太郎・浅井義弘, 2008, 「新規放課後活動に対する小学児童の満足度調査: 子ども自身による『放課後子ども教室』評価の支援」, 『川村学園女子大学研究紀要』, 第19巻, 1,

放課後子ども教室について児童の声を聴く

pp.85-104

北原靖子・蓮見元子・川嶋健太郎・浅井義弘・柴田恵江, 2008, 「小学生による「放課後子ども教室」評価への支援」, 日本発達心理学会第19回大会発表論文集

小泉裕子・川口和英・田爪宏二・長谷川岳男・柴村抄織・大石美佳, 2003, 「〈遊び場空間〉の現状分析とこれからの公園のデザイン」, 『鎌倉女子大学紀要』, 第10号, pp.11-20

宮部徳子・仲野隆士・丸山富雄, 2007, 「子どもの居場所づくり」推進事業の評価と課題に関する研究—事業に対する指導者・参加児童・親の参加実態と意識に注目して—」, 『仙台大学大学院スポーツ科学研究科修士論文集』, 第8巻, pp.83-90

文部科学省・厚生労働省放課後子どもプラン連携推進室, 2007, 放課後子どもプラン—未来の大人たちのために, 今できること <http://www.houkago-plan.go.jp>

謝辞

本調査は、科学研究費補助金（萌芽研究）と本学教育奨励研究費の助成を得て行われました。また、調査の実施は、我孫子市教育委員会・我孫子市子ども福祉部・我孫子市第一小学校のご理解ならびに第一小学校学童保育保護者のご協力を得て可能となりました。各位のご賛同ご協力に対しまして、ここから感謝申し上げます。